

ゆが くに  
歪みの国の  
アリス

まよなか ちゃがい  
真夜中のお茶会

かぶしきがいしゅ  
株式会社ナイトメアスタジオ / 原作

こづかとうり  
孤塚冬里 / 著

こ  
チェリ子 / イラスト

004 第一章 終わらない放課後

088 第二章 狂騒のホテル ブランリエーヴル

168 第三章 見慣れた街の 見慣れぬヒトたち

208 第四章 真夜中のお茶会



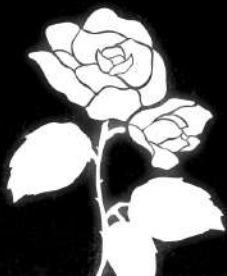
アリス 僕らのアリス

あなたの腕を 足を 首を 声を 僕らにください

あなたを傷つけるだけの世界なら捨ててしまつて

ちぎれた体は狂気に包まれて穏やかに眠る

さあ、覚めることのない悪夢をあなたに……



## 第一章

### 終わらない放課後

ゆっくりと息を吸いこみ、吐きながら目を開けた。

視界はどこかぼやけている。瞬きを何度か繰り返してもまだ頭がうまく働かず、ようやく自分がうたた寝をしていたのだと気がついた。

自習室はとても静かだった。誰かが本をめくる音すらしない。窓から差しこむ攻撃的な夕日の色を、白いカーテンがやわらかく包みこんで室内を淡く染めていた。

——何か夢を見ていたような気がする。

しかし、思い出そうとしても何も思い出せない。もしかしたら、夢など見ていなかったのかもしれない。それとも、今もまだ夢の中？

夢でないとしたら、なぜ三日目を横にしたような口が目の前にあるのか意味がわからなかった。薄く開かれた口からは、黄ばんだ鋭い歯が見えている。亜莉子はまだはつきりしない頭をかしげた。

ああ、大きな口だなあ。赤ずきんちゃんを食べる狼の口みたい……。



狼なら、口が耳の下まで裂けていてもま  
だわかる。狼はそういう生き物だから。

やはりまだ夢を見ているのかもしれない。

でも、たまに思う。

——夢と現実の違いは、一体誰が決めるの  
だろう。

今度はさつきとは逆の方向に首をかしげよ  
うとした時、

「おはよう、アリス」

目の前の三日月型の口が言った。

「!!」

反射的に体を後ろに引いたせいで、椅子か  
らずり落ちそうになる。まだ、何が起こった  
のか理解できていなかった。

その人はまるで猫のように手足を縮めた姿

勢で、机の上に乗っていた。灰色のフードを目深にかぶっているせいで顔は見えない。見えているのは、あの耳元まで裂けた口だけだ。三日月型のせいとか、その口はにんまりと笑っているように見える。ただそれは愛想よく見えるといった類いの笑みではなく、気味の悪いそれだった。顎のラインは細く女性的にも見えるが、声の低さからすると男性のようにも思える。

亜莉子は相手を刺激しないように静かに立ち上がり、距離を取った。

先生たちは何をしているのだろう。こんな見るからに不審な人物を学校に入れるなんて。誰か人を呼ぼうとしたが、あいにく室内には亜莉子たちのほかに誰もいなかった。

「あれ、雪乃は……?」

テスト勉強をしようと一緒に来たはずの友人の姿が見当たらない。まだ寝ぼけているのかと雪乃を探そうとする亜莉子をさえぎるように、

「ユキノはいないよ」

とフードをかぶった男が言う。その得体の知れない不気味さに、亜莉子の足は勝手に一歩下がっていた。

「……先に帰っちゃったのかな」

ひとりごとのつもりだった。だがそれにまた同じ返事が繰り返される。

「ユキノは、いない」

にやにやと笑う口。足に力を入れていなければ、逃げ出してしまうところだった。それほど、異様な雰囲気があった。

「……あ、あの……じゃあ、私も帰りますね……」

無視するわけにもいかず、あいまいな愛想笑いを浮かべて机から離れる。

男に背を向けるのにはかなりの勇気が必要だが、ずっとにらめっこしているわけにもいかない。亜莉子は努めてゆつくりとした歩調で自習室のドアまで向かった。早くここを出て先生に知らせないと。変な人がいるって。

引き戸に手をかけたところで、亜莉子は後ろを振り返った。そして後悔する。怖い物見たさという出来心は、後悔しか生まない。

「キャアアツ!？」

目と鼻の先に、男は立っていた。

まるで亜莉子にびたりと寄り添うように。

勢よく飛びのいたせいで、背中がドアにぶつかり大きな物音を立てた。心臓が痛いくらいにばくばくと脈打っている。

近寄つてくる足音なんてしなかった。いくら緊張していたとはいえ、これだけ近くに来られれば気づいたはずだ。

膝が震え、亜莉子はその場にずると座りこんだ。男はただにんまりと笑い、亜莉子を見下ろしている。

「な、なな何かご用ですか!? あなた誰……!?!」

動揺しすぎて、声が震えていた。

「僕はチェシヤ猫だよ」

「チエ、チエシヤネコさん? ……外国の人?」

「さあアリス、シロウサギを追いかけよう」

「は……ウ、ウサギ?」

言葉は通じるようだったけれど、話は通じそうにない。どうして突然ウサギの話題が出てくるのかと、亜莉子は眉根を寄せた。

「ウサギを……探してるんですか?」

ウサギでも猫でもかまわないから、もう少し離れてほしい。

亜莉子は背をドアに押し付けどうにか距離を取ろうとしたが、男はそれに気づいているのかい



ないのか、近い距離を保ったまま小首をかしげるだけで一向に離れてはくれない。

「僕は探していないよ。アリスが追いかけるんだよ」

やはり、会話がかみ合わない。亜莉子は自分の方がおかしいのだろうかと不安になりながらも、どうにか会話を成立させようと次の質問を口にした。

「……アリスって？」

「きみだよ」

「ちつ……違います！ 私、アリスじゃないです！」

激しく首を横に振ってから、ああ、そうかと思いいたる。

「なんだ、人違いなんですわね」

それなら、話が通じないわけも、この近すぎる距離も……なんとか納得できる。亜莉子がほと息をつくのと、

「違うよ。僕らはアリスを間違えたりしないよ」

何をおかしたことを、といった口調で男が反論する。

「でも私はアリスじゃないんです」

「アリスだよ」

「いえ、違いますつてば！ わ、私は葛木亜莉子つていうんです」

「……………」

夕日を背に立っているせいで、こんな近くにいるのに男の表情は逆光になりよく見えなかった。ただ、納得していないことだけは空気でわかる。

「そりやちよつとアリスと音は似てますけど、私、生粋の日本人だし、英語もかなり苦手だし、ええとだからつまり……私はアリスじゃないんです！」

「……………」

首をかしげたまま亜莉子を見つめていた男は、ようやくこくりとうなずいた。よかった。これで誤解が解けた。

「じゃあアリス、シロウサギを追いかけよう」

「!!」

亜莉子は言葉を失つて男を見上げた。この人、まるで話を聞いてない。一生懸命説明をした自分の努力の報われなさに開いた口がふさがらない。

男は悪びれた様子もなく、亜莉子を見下ろしていた。見上げた先には、相変わらずにんまりと笑う口が見える。それより上の部分には暗い暗い闇しかなかった。

視線をぎこちなく外そうとした時、その闇が音もなく近づく。

吸いこまれてしまいそうな闇に見入っていると、男が亜莉子に向かって手を差し出した。その瞬間、亜莉子はそれを払いのけていた。小気味よい音が室内に響く。

しまった、やりすぎた。そう思つても、もう遅い。男は叩かれた手をじつと見つめている。怒らせたのかもしれない。

「ごごごごめんさい、でも、あの、もう帰らないと遅くなるし……！」

後日またあらためて、と逃げるように背を扉へと押し付けると、再び男の棒読みの声が降つてきた。

「……消えろつてことかい？」

正直に言えば、今すぐ消えてほしい。

でも、さすがにそれを口にするわけにはいかず、何も応えられずにいると、男も黙つたまま亜莉子を見下ろしてくる。刺されたり、しないよね？

表情がわからないから想像だけがたくましくなつてしまう。今日の夕刊の一面に自分の記事が載るところまで想像が進んだ時、ずきつと脇腹が痛んだ。瞬、本当に刺されたのかと脇腹を見下ろしたが、制服に穴が開いていることも、血が出ているようなこともない。想像しただけで痛

いと思ふなんてどうかしてる。

沈黙が恐ろしくて目をきつく閉じると、男はようやく口を開いた。

「僕らのアリス、きみが望むなら」

どこか満足げな、芝居がかった口調。目を開けて絶句した。

——消えている。

床まで届く灰色のローブが、膝あたりまで消えていた。あまりのことに何も言えず、その様子を亜莉子はただ見つめることしかできない。男の体は下から上にどんどん消えていく。やがて三日月型の口が消え、きれいさっぱり跡形もなく、消えてしまった。

「え……な、なんで!？」

自分で自分の目が信じられない。たしかに消えてほしいとは言った。言っただけで、誰がこんな消え方をすると予測するだろう。

ドアに手をつけて体を支えながら立ち上がり、今の今まで男が立っていた場所をじつと見つめる。どんなに目をこらしても、男がいた痕跡は何も残っていないかった。

……帰ろう。理由はわからないけれど、きつと疲れているのだ。

それ以上考えることを拒否し扉に手をかける。

「……どうなってるの……?」

廊下に出た亜莉子は、再びその場にへたりこんだ。

……廊下が長いなんて知っていたけれど、問題はそこではない。

その廊下には、「果て」がなかった。

恐る恐る視線を動かして、息を詰める。すぐ隣にあったはずの階段もなくなっていた。今はただ平凡なクリーム色の壁があるだけで、これではどうやって外に出たらいいかもわからない。

すぎるような気持ちで後ろを振り返ったが、誰もいない自習室に戻る気にもなれない。扉にかまりなんとか立ち上がった亜莉子は、しかたなく廊下へと足を踏み出した。

廊下の右側には規則正しく窓が並び、真っ赤な夕日色に廊下を照らしている。左側には同じように等間隔で教室のドアが並んでいる。先生はおろか、生徒の姿すら見当たらない。それに何の音もしなかった。

窓の外を見下ろすと、前庭と街並みが見える。見慣れたその風景に、何故か違和感を覚えた。しばらく見つめていて、ようやくその理由がわかる。

——静かすぎるのだ。

放課後だというのに、はしやぐように帰りを急ぐ生徒の姿がない。今いる場所が四階なので街

並みはかなり遠くまで見渡せるのだが、街の中を行き交う自転車や車の姿もひとつも見つけられなかった。

たまたま、生徒がいないタイミングで、たまたま、車が少なくて見当たらないだけかもしれない。窓を開けさえすれば、生徒のにぎやかな声と街の生活の音がきつと聞こえる。そう思ったけれど、窓を開ける気にはならなかった。

亜莉子は視線を左側に向ける。こんなにもたくさんさんの教室があつたなんて、今まで知らなかった。ドアの上のプレートには何も書かれていない。

毎日通っている学校、いつもと同じ放課後、亜莉子が住んでいる見慣れた街。亜莉子が一番慣れ親しんだ場所のはずなのに、よそよそしい空気に満ちている。私はここにいてあつてる？ 不安な気持ちを抱えながら、廊下を進んでいく。



……廊下はいくら歩いても終わりがなかった。

亜莉子はいくつ目かの教室で勇気を出し、後ろ側のドアに手をかけた。後ろであることに何ら

意味はない。前から入るのは少し気が引けるといふそれだけの理由だ。

どうせここにも誰もいないだろうと、断りもなしに扉を引いたが、予想に反して教室の真ん中にぼつりとたたずむ後ろ姿があった。世界から人が消えてしまったわけではなかったんだ、とほつと息がもれた。

「あの……！」

反射的に駆け寄ろうとしたけれど、妙なものに目を吸い寄せられて足が止まる。その人は青いワイシャツとストラックスを身につけており、服装だけ見ればサラリーマンのように見えた。しかし、亜莉子の足を止めたのはその服装のせいではない。

その人の頭はふわふわと白い体毛でおおわれ、頭のとつぺんから長い耳が二本生えていた。どう見ても、それは『ウサギの頭』だ。

体はどう見ても普通なのに頭だけウサギだなんて、どういう趣味なのだろうと知らず眉根が寄った。

さらによくよく目をこらして見ると、向こう側の景色がうつすらと透けて見えた。半透明の人間だなんて、非常識だ。とはいえ、やっと見つけた人だ。どんなに非常識でも誰もいないよりはいい。

「あ、あのう……」

亜莉子は教室の隅を通つて正面へと回りこむ。まだ、この時はウサギの着ぐるみか何かだろうとちよつと期待していた。

でも、その期待はあつさりと裏切られた。

ウサギの頭は作り物ではなかった。正面から見た顔も白い体毛におおわれ、草食動物らしく前にやや突き出た鼻は赤い。つぶらな赤い瞳も、どう見てもウサギそのものだ。

だが問題は顔よりもその手だった。手も、恐らくは顔と同じように真っ白な毛でおおわれているのだろう。だろう、というのは手全体が真っ赤に染まつていたからだ。

その色はまるで——血のように見えた。

ウサギは亜莉子の方に見向きもせず、腕に抱いた人形をあやすように体をわずかに揺らしていた。人間の赤ちやんほどの大きさの人形だ。

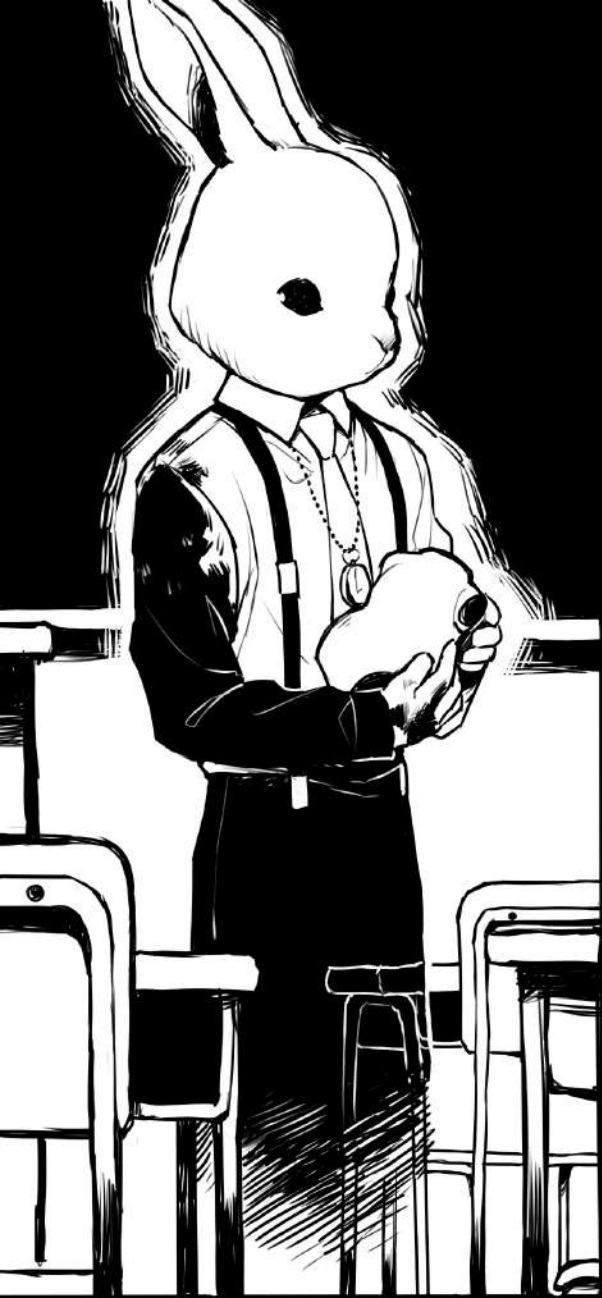
亜莉子はよく見ようと目を細めて、その不気味な形態に口元を押しさえた。

赤ん坊特有の水気を含んだぶつくりとした体。人形は、その胴体しかなかった。頭も、腕も、足もない。

それを大事そうに抱き、ウサギは歌っていた。



ウデ ウデ ウデ  
ウデはどこだろ



ウデがなくつちや

僕にふれてもらえない

ウサギの手から伝つた血が、人形の腹を滑り床へと落ちる。鮮やかな赤は今流されたばかりのものに見えた。

「足りないなあ」

ぼそりとこぼされたつぶやきに、亜莉子の肩が震えた。

床に落ちた血から、視線をウサギへとゆつくり戻す。目が合うのではと恐れていたが、ウサギは亜莉子の方ではなく、どこか遠くを見つめていた。もしかしたら、亜莉子がいることすら気づいていないのかもしれない。

「だめだめ、足りない……急がなきゃ……」

ぶつぶつとひとりごとをこぼしながら、白いウサギは覚束ない足取りで扉に向かって歩き出した。半分透けた体は机をすり抜けていく。信じられないことばかりが、目の前で起きていた。

閉ざされたままの扉を通り抜ける直前、完全に固まってしまっていた亜莉子の耳にウサギのかすかなつぶやきが届く。

「アリス……」

何か反応をしめす間もなく、ウサギはドアをするりと通り抜けて消えた。

今見たものは、なんだったのだろう。ウサギの幽霊？ それとも幻覚？

……まだ、夢を見ているのだろうか。

亜莉子は、ふらふらと今までウサギが立っていた場所に近寄った。そこには、たしかにウサギがいたのだと主張するように、赤い水たまりができていた。夢でも、幻でもない。

血だまりから、ぼつりぼつりと血の跡が前の扉へと続いていた。それを追うようにして扉を開けると、その跡は廊下の奥に点々と続いている。

廊下の果ては相変わらず見えない。

考えるよりも先に、足が動き出していた。まるで血に誘われるように、亜莉子は廊下の奥へと歩き出す。



いくら歩いても、廊下の果ては訪れなかった。